

沈黙に向き合う

沖繩戦聞き取り47年

(57)

石原 昌家

文化

前回紹介した手紙の主・小渡照生さんは、去る2月10日、ご夫妻で大阪から私の家に足を運んでくれた。楊姓門中の中宗家を預かる私の家で門中を同じくする妻・美智子さんが、ルーツをたどる旅の途中でもあった。だが、話題は海南島の父の戦時体験から始まった。私に手紙を送った後、気になる短歌が目に留まったというので、先に贈呈されていた『小石のつばき』(写真参照)を持ち寄って、二人で確認しあった。



「小石のつばき」

小渡照生

言を読み、フラッシュバックし、苦しい思いがよぎっているようだった。照生さんの手紙は「だんだん書くのが苦しくなってきた。ここらで筆を置きます」と、結んでいる。

中国侵攻

読者からの手紙(下)

照生さんが「苦しくなっ
なく、戦闘に参加していた
頭上を越ゆる黒き弾影」
(102頁)は、まさきも
を明らかにしている。

そして那覇の久米村で
は、「北京語を覚えるため
の歌があり、子供らが暗誦
祖の土地へ侵攻することを

父、「先祖の地」侵攻に苦悩 中国渡来の久米村に出自

て来ました」というのは、父が「中国への回想は、たとえ実際の戦闘には参加せず、従って一人の生命も奪ってはいないにしても、胸が痛む。そしていまなお、悔と責めを負うて中国に対する。人も自然も、心から愛し、親しむべき、中国であつたにもかかわらず」(336頁)の記述に疑問を感じたからようだ。「一人の生命も奪っていないにしても「戦闘には参加せ

余地がある。
父・有得さんは「私の先祖は、今から約六百年前に琉球の造船や航海の技術、海外貿易や外交、それに伴う文書の作成など、その他もろもろの指導のため、当時明国とよばれていた中国」からの渡来人と、出自を明らかにしている。
そして那覇の久米村では、「北京語を覚えるための歌があり、子供らが暗誦祖の土地へ侵攻することを

間、もしや父に似た人がいないかとひそかに胸を痛めておりました(336)とい
う。
中国人の子孫だから、中国のなかに父似がいないかと思つたよとしていたのは、召集3か月前に父が他界していたからでもあろう。「父の死後の応召でよかったと思ひました」(40頁)というのは、息子が先祖の土地へ侵攻することを

間聴き取りしたのは、1983年、浦添市牧港の又吉栄長さんからであった。4回に分けて聴き取りするほど、中国戦線や沖縄戦でさまざまな体験を語られていた。44年、日本軍が沖縄へ移駐し、陣地構築をしていくとき曹長が牧港の区長に到底実現できない無理難題の供出を命じた。命令は絶対なので、区長は戦地帰りの栄長さんに泣きついた。
それを聞いて「私は激怒してその曹長の所にかけてきました。『私は満州で二か年、支那で二か年武漢攻略まで戦闘をやつてきた。あなたがたは華南作戦やつてきたと大威張りしているがカナワシ(敗北の意)作戦をやつてきたんじゃないか本当の戦闘体験は私の半分もやつていないじゃないか』とまずそういつたのである」(浦添市中第五巻1984年、35頁)と、啖呵を切つて無理難題を退けた。日本軍の命令を覆した唯一の住民証言である。
その中国での体験を語っている中で、突然、声を潜

30名ほどの小部隊で作戦中、一人の兵士がどこからともなく飛んできた弾で即死した。仕返しのため兵隊兵を探し回つた小隊が、ある老幼男女のみの集落を山中で見つけた。その村人が斥候兵を手引きしたにちがいないと判断した小隊は、村人を皆殺しすることになった。銃弾は戦闘用だ、という理由で手斧を用いて一人残らず殺害した。
その部隊には又吉さんのほかに新垣さんという沖縄出身兵士もいた。私は「沖縄の兵士もその殺害に加わつていたのですか」と単刀直入に尋ねた。すると、「とんでもない、怖くて逃げていましたよ。そしてクニンダンチュウの新垣さんに『エー、イッター、ウヤファーフジあんたがたの(ご先祖)の国でこんなことをしているのをどう思つたのか』と聞いたら、『シッ、アディンケ(黙って)、自分が中国系と部隊に知られたら自分も殺されるかもしれない』と、恐怖に慄いていたとい

この証言が前述の私なり「根拠」である。
(次回は3月後半掲載)